

特集：子どもの文学の一年

★ 総論

一つの「終焉」、そのあとに

——共有化される〈児童文学〉ジャンル——

佐藤 宗子

1

二〇一二年は、児童文学の世界を広く取り巻く状況を考えた際、「ゼロ年代以後」であることが強く実感された年であった。というのも、私は「二〇一〇年」を「現代児童文学」の「終焉」の年であった、と捉えているのだが、その流れでいえば二〇一二年は出版文化に関わる電子化が本格化した年であり、また〈児童文学〉の「共有化」傾向が強くみられた点も指摘できる。以下の各節で、まずは二〇

一〇年の捉え方を説明した後、電子化に関わる状況、作品や批評の特徴、「共有化」の実感等を説明していきたい。

2

一九五九年を「現代児童文学」出版の年とみなすことは、すでに共通理解を得てきた。それから約半世紀を経た二〇一〇年をその「終焉」と私が捉えるのは、この年に起こった四つの出来事——鳥越コレクションを母体とした府立大阪国際児童文学館の閉館、作家後藤竜二の逝去、理論社の事実上の倒産、編集者伊藤英治の逝去——によってである。鳥越信（二〇一三年二月逝去）は、「現代児童文学」出版前夜から、「童話伝統批判」を行ってきた当事者の一人である。また、彼のコレクションをもとにした大阪国際児童文学館が八四年に開館したこと自体、時代状況の中で「現代児童文学」が独自性をもつものとして認知された結果だったと考えられる。後藤竜二は、六〇年代の登場以来、ゼロ年代にいたるまで、「現代児童文学」の理念をもっともよく体現した作家の一人であったといっていよい。理論社の児童書刊行開始が「現代児童文学」の出版と深く関わる